様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 18 日現在

機関番号：13101
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520502
研究課題名（和文）　日英語の名詞節化形式の意味と談話機能の派生メカニズムに関する理論的・実証的研究
研究課題名（英文）　A Theoretical and Empirical Study of the Derivation Mechanism of the Meaning and Discourse Function of Nominalizing Constructions in English and Japanese
研究代表者
大竹　芳夫　(OTAKE YOSHIO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：60272126

研究成果の概要（和文）：　本研究は，日英語の名詞節化形式の意味と談話機能の派生メカニズムについて総合的視点から検証し，両言語の普遍性と個別性を明らかにした。日本語のように補文命題の既定性を表出するために名詞化詞「の」,「こと」,「もの」,「わけ」などを発達させてきた言語や, 英語のように主題表示が義務的で補文形式のみならず it の指示特性を活用しながら既定性を積極的に合図する言語など，言語により既定性の保証過程が異なることを理論的・実証的に説明した。研究成果を学術図書『「の（だ）」に対応する英語の構文』東京：くろしお出版．単著.【平成 21 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費（学術図書））課題番号 215060, 日本学術振興会】等にとりまとめて社会・国民に迅速かつ広範に還元することができた。

研究成果の概要（英文）：　The *It is that*-clause construction is structurally similar to the *No da*-construction in that the copula takes a nominalized clause as its complement. Due to its structural similarities, the *It is that*-clause construction corresponds well with the *No da*-construction semantically.　The syntactic, semantic and pragmatic properties of the *It is that*-clause construction, however, have not yet been fully elucidated.　The semantic and functional characteristics of the *It is that*-clause construction have been cross-linguistically borne out by comparison with the *No da*-construction in Japanese in this project.　We have endeavored to clarify some characteristics of various English constructions corresponding to the *No da*-construction as theoretically as possible, referring to collected linguistic data.　A unified account of the *No da*-construction and its equivalent constructions in English has also made it possible to pierce straight to the heart of the *No da*-construction.　In other words, we have compared and contrasted both languages from a common viewpoint to clarify the similarities and the differences of the process of expressing the object of cognition or consciousness.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：　言語学・英語学
キーワード：　日英語比較研究，名詞節化形式，「の（だ）」，補文，指示表現，認知，比況構文

１．研究開始当初の背景

本研究は，最近の言語理論研究の成果を活用し，日英語の名詞節化形式と意味・談話機能がどのようなメカニズムで取り結ばれているのかを原理的に解明することを目的とする。本研究では，「の（だ）」に対応する英語構文の分析を通して，日英語の名詞節化の形式と意味・機能がどのようなメカニズムで

取り結ばれているのか,「の」による名詞節化と英語の指示表現 it や that の選択が情報の既定化にどのように関わっているのかについて理論的，記述的に明らかにする。

まず，名詞節を補文に従える日本語の構文に「の（だ）」構文がある。日本語の談話で頻用される「の（だ）」は外国人学習者にとって習得しがたいとしばしば指摘される。実際に，英語や中国語を母語とする留学生の日本語のエラーには「の（だ）」の使用に問題がある場合が観察される。日本語学の分野において，「の（だ）」構文に関する先行研究は非常に多い。しかし，「の（だ）」を他言語における対応構文と比較したうえで，その普遍的，個別的特性を究明するには至っていない。本研究では，it の指示性に関する最近の意味論研究や語用論研究の成果，さらには日本語の「の」節との比較検証を踏まえて，「の（だ）」構文に対応する英語構文の構造の同定や意味・機能の解明を試みる。「の（だ）」構文に対応する英語構文はひとつではない。それは，「の（だ）」構文で表現される事象が，英語ではさまざまに切り取られて言語化されることを裏付けている。例えば，相手の謝罪に対する応答として用いられる(1a-b)を比較しよう。

(1) a. “I’m sorry I broke the vase.” “{*That* / *It* }’s all right.”
b. 「花瓶を壊してしまい，どうもすみません。」「いい{ですよ/んですよ}。」

(1a)は，形容詞句を補部に従える英語構文の主題に it が選択されて，(1b)の「の（だ）」構文に対応する例である。

次の(2a)，(3a)の斜体字を含む英語構文もまた「の（だ）」構文に対応する。

(2) a. “What is that noise?” “*It* ’s Jimmy playing the piano.”
b. 「あの音はなんだろう？」「ジミーがピアノを弾いているんです。」

(3) a. I didn’t mean to upset you. *It* ’s just that I had to tell somebody.
b. 私はあなたをびっくりさせるつもりではありませんでした。ただ，だれかに話さなければならなかっただけなのです。

(2a)は小節(small clause)と呼ばれる NP V-ing を，(3a)は that 節を補部に従える英語構文であり，いずれも「の（だ）」構文に対応する。本研究では，(2a)のような構文を S be NP V-ing 構文，(3a)のような構文を It is that 節構文と呼び，比較対照する。

次に示す(4a)の斜体字を含む構文も本研究での考察対象である。

(4) a. Thank you for permission to visit Julia ― I *take it that* silence means consent.
b. Julia のところへ行くことをお許しいただきありがとうございます。お返事がないということは承諾されたのですね。

(4a)は動詞 take が it を介して that 節を後接する構文であるが，(4b)のように「の（だ）」構文と対応関係がある。本研究では(4a)のような S take it that 節構文の特性を分析したうえで，「の（だ）」構文と比較検証する。

「の（だ）」構文は否定化や疑問化を受け，「のではない」や「の（か）」という文末形式として現れる。次の(5a)の It is not that 節構文や(6a)の Not that 節構文は「のではない」に，(7a)の Which is it 疑問文や(8a)の{Why / How} is it that 疑問文は「の（か）」に対応する。

(5) a. That spirit seemed to have dissipated by the end of the decade. *It is not that* we were not successful. We were.
b. その気概は 10 年後には消えてしまったように思える。私たちは成功しなかったのではない。実際には成功はしたのだ。

(6) a. Where were you last night? *Not that* I care, of course.
b. あなたは昨夜どこにいたのですか？もちろん気にしているのではありませんが。

(7) a. So *which is it*: is there progress or isn’t there?
b. それで，どっちなんだ？進歩があるのか，それともないのか？

(8) a. {*Why* / *How* } *is it that* Mary is not happy?
b. メアリーが幸せでないのはいったい｛なぜ / どうして｝なのか？

また，接続表現「ので」は「の（だ）」と同じ名詞化詞の「の」を含み，(9a)の now that 節，(10a)の in that 節と対応関係を示す。本研究では，これらの接続表現を比較対照しながら原因や理由の意味を派生する日英語の言語化プロセスの相違を分析する。

(9) a. We can expect milder weather, *now that* spring is here.
b. もう春なので，穏やかな天候が期待できる。

(10) a. We are fortunate *in that* we have really good kids to work with.
b. 本当にいい子たちと仕事ができるので，私たちは幸せです。

上記の(1)–(10)の諸例が示すように，「の（だ）」構文に対応する英語の構文は多様である。しかしながら，これまでの研究においては，「の（だ）」構文の対訳として(3a)のような It is that 節構文がしばしば示されるにとどまって

おり，名詞節を補文に従えるという形式的な類似性にしか着目されてこなかった(Kuno 1973; Kuroda 1973; 池上 1981; Lombardi Vallauri 1995; 野田 1997; Tsubomoto 2000)。また，It is that 節構文自体の形式，意味，機能についても解明の途にある。本研究では，収集した言語資料を観察しながら，可能な限り理論的，実証的に「の（だ）」に対応する英語構文の諸特性の解明を試みる。同時に，「の（だ）」構文と対応する英語構文を統一的な見地から比較検証することにより，「の（だ）」の本質により深く迫ることが可能となる。

さらに，It is like 節構文と It is not like 節構文の諸特性の解明も本研究課題である。本研究は，英語学のみならず，日本語学，世界の諸言語研究，言語教育学を含む広い関連分野に対して波及性が高い研究内容である点に特徴がある。

２．研究の目的

本研究は，日英語の名詞節化形式と意味・談話機能がどのようなメカニズムで取り結ばれているのかを共通の視座で比較対照しながら原理的に明らかにすることを究極的な目標とする。

３．研究の方法

次の研究方法に沿って本研究対象となる言語現象に対して研究成果を取りまとめる。

(1) 本研究課題に関連する従来の研究を，批判的に検証する。日英語の名詞節化形式を統一的な視点から分析し，体系的に記述するために，基本的な文法概念を提出する。
(2) 実証的な研究を目指し，研究対象となる日英語の構文が用いられている基礎的資料を収集，観察，分析する。
(3) 日英語の名詞節化形式が示す統語的・意味的特性の異同を考察するために，どのような発話場面や状況によりそれぞれの補文が選択されるかを明らかにしながら最近の言語理論との関連性を検証しつつ，話し手の認識と知覚に関わるメカニズムと文法化過程を説明する理論的仮説を立てる。
(4) 当該仮説に一見反すると思われる諸例について，日英語母語話者をインフォーマントとして活用しながら徹底的な分析を行い，総合的視座から日英語の名詞節化形式の生起に関わる制約を明らかにする。
(5) 名詞節化という言語事象を通して，日本語と英語の個別性，普遍性の両面を体系的・原理的に明らかにする。併せて，本研究で得られた知見の他言語への敷衍可能性について提示する。
(6) 本研究で得られた言語学的知見が英語教育，日本語教育でどのような教育的意義をもつのかについてもとりまとめて発表し，示唆と提言を行う。
(7) 研究成果の記述的・理論的意義を体系化し，社会・国民に迅速かつ広範に還元する。

４．研究成果

研究初年度の平成 21 年度は，実証的研究を目指し，研究対象の日英語構文に関する基礎的資料を収集，観察，分析した。また，基本的文法概念や問題点を整理しながら，本研究課題の名詞節化現象を理論的枠組みの中で分析する基礎を構築し，言語学の研究成果を英語教育に活用する方策についても検討を進めた。初年度の成果実績として，学術図書（『「の（だ）」に対応する英語の構文』（単著）356pp. ISBN:978-4-87424-464-7，くろしお出版，2009 年.）を挙げることができる。本学術図書は，「の（だ）」に対応する英語構文の諸特性の解明を試みた大竹（2008）（博士（応用言語学）学位論文「「の（だ）」に対応する英語の構文」）に本研究で得られた知見を反映させて加筆修正を施し，平成 21 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費（学術図書）（研究代表者：大竹芳夫），日本学術振興会，課題番号 215060）の助成を受けて刊行したものである。本学術図書は，(i)「の（だ）」と対応する英語構文を統一的な見地から比較検証することにより「の（だ）」の本質により深く迫ることができた点，(ii)従来は個別的に論ぜられてきた日英語の名詞節化形式について，両言語を共通の視座で比較対照しながら認知や知覚の対象を言語化するプロセスの異同を原理的に明らかにした点，(iii)国内の研究者に先駆的知見を直ちに還元できるように，英語の実例すべてに対訳を付した豊富な言語資料を提供しており，英語学，日本語学，世界の諸言語研究を含む広い関連分野に対して波及性が高い研究内容である点に特徴がある。大竹（2009）『「の（だ）」に対応する英語の構文』では，「の（だ）」構文で表現される事象は英語ではさまざまに切り取られて言語化されることが解明され，次のような知見が得られた。

(1) 発話場面で瞬間的に知覚された事態の同定を表す「の（だ）」構文には，小節を補文に選択する S be NP V-ing 構文が対応する。一方，先行情報の論理解釈や事の真相・実情の同定といった認識レベルで把捉できる情報を伝える「の（だ）」構文には，that 節を補文に従える It is that 節構文のような S be (that)節構文が対応する。両構文の意味的相違は構造上の相違から説明される。つまり，S be NP V-ing 構文の NP V-ing は独立した時制をとらず主節に依存して存在するため，主語 S が指す事態の同定は，知覚レベルでその事態の存在の確認と瞬間同時的に行われる。一方，S be (that) 節構文は主節と補文が独立した時制をとり得ることから，たとえ進行相が補文内に生じていてもその時間は主節のコピュラ be が表す

瞬間的同定時とは全く同時ではない。そのため，S be (that)節構文は，先行情報や当該状況の真相，実情の同定，論理的解釈といった「知覚的」にはとらえがたい情報を提出することが明らかとなった。「の（だ）」構文は，こうした知覚と認識を区別せず，話し手の知識にすでに取り込まれている情報であることを積極的に表現するという意味特性をもつことが確認できた。

(2) 先行情報や現況を同定するときに，主題表示が随意的である日本語は「の」，「こと」，「もの」，「わけ」といった多様な名詞節化詞を活用しながら補文命題の情報特性を表現できる。それに対して，英語は既獲得情報を合図する指示表現 it を用いることで結果的に補文命題の既定性を表現するという相違を明らかにした。例えば，先行情報の解釈を補文内に与える「の（だ）」構文に対応する It is that 節構文の場合には，主題位置に it を立て先行情報を既獲得情報として積極的に表示したうえで，補文内に既定情報を同定命題として提出する。一方，ある命題内容を既定情報として理解に取り込む過程を開示する「の（だ）」構文に対応する S take it that 節構文の場合には，後続する that 補文の命題内容を it で既獲得情報として積極的に指示することを理論的，実証的に説明した。

(3) 疑問文の「の（か）」に対応する構文として，Which is it 疑問文，Why is it that 疑問文，How is it that 疑問文を取り上げ，名詞節化詞「の」と指示表現 it による命題情報の既定化の類似点と相違点を示した。Which is it 疑問文は，発話に先立ってその答えがどちらかにすでに定まっているものととらえたうえで，その答えを相手から聞き出そうとする状況で用いられること，「の（か）」を伴う選択疑問文と同様に状況によっては相手に事実を問い詰めたり，発言の矛盾を突くといった語用論的含意を帯びることも実証的に考察した。Why is it that 疑問文，How is it that 疑問文の it は that 節内に取り上げた命題内容を積極的に既獲得情報として表示する。そのため，Why is it that 疑問文，How is it that 疑問文の使用は，話し手がその取り上げた事象が不条理に成立していたり，矛盾をはらんでいるにもかかわらず現実に成立していると判断するような場合に厳しく制限されることを論じた。

(4) 接続表現「ので」と now that 節，in that 節を比較対照し，原因や理由の意味を派生する日英語の言語化プロセスの相違を分析した。「ので」節の「の」と now that 節や in that 節の that は名詞節化する共通の機能を有する。しかしながら，「の」はそれ自体が命題情報の既定性を積極的に保証するのに対して，that は節内の情報の既定性を積極的には表示しない。英語の now that 節は主節の情報を時間軸に位置付けることで，また in that 節は主節の情報を空間領域に位置付けることで that 節の情報が既定的に解釈され，「ので」と類似した意味を表現することを説明した。つまり，「ので」節と now that 節や in that 節が類似した因果関係の意味解釈を表現しても，それは時間と空間という異なる認知基盤に基づく言語化のプロセスを経ることを明らかにした。

(5) 多様な用法をもつ「の（だ）」の中には形式的に特別な英語構文と対応しないものがあることを指摘した。

(6) 「の（だ）」構文に対応する構文は世界の諸言語に存在し，意味や機能において類似した特性を示す。日本語のように補文命題の既定性を表出するために名詞化詞「の」，「こと」，「もの」，「わけ」などを発達させてきた言語や，英語のように主題表示が義務的で補文形式のみならず it の指示特性を活用しながら既定性を積極的に合図する言語など，言語により既定性の保証過程が異なることを説明した。

初年度の研究成果は学術論文・図書に取りまとめられて社会に迅速かつ広範に還元されており，当初の目標を達成することができた。

平成 22 年度は，初年度の研究成果である大竹（2009）『**「の（だ）」に対応する英語の構文**』が増刷され，英語学分野のみならず日本語学や日本語教育等の関連分野でも引用を受けていることから，本書で示した知見が各分野でどのような意義をもち，理論的枠組みに位置づけられるのかについて検討を開始した。また，大竹(2011)では，what kind of 疑問文(=(7))と，不定冠詞を伴う what kind of {a/an}疑問文(=(8))に用いられる名詞句の意味特性に着目しながら，両疑問文の意味と機能を考察した。

(7) What kind of dinosaur is that?
(8) What kind of a dinosaur is that?

具体的には，両疑問文に生ずる名詞句には特別な含意を派生しやすい二つのタイプがあることを明らかにした。“idiot”のようなタイプの名詞句を伴う what kind of 疑問文と what kind of {a/an}疑問文は，直接的に愚行，醜行を認定して侮ってあざける含意を派生する。一方，“mother”のようなタイプの名詞句を伴う what kind of 疑問文と what kind of {a/an}疑問文は反語的機能をもち，名詞句の表す範疇区分に共通して認められる性質や属性を話題中の人物が有していないという話し手の意識下で発話されるため叱責や問責の態度表出といった機能，ときには世辞や褒詞の表明といった機能も帯びることを確認した。

研究最終年度の平成 23 年度は，平成 21-22 年度に得られた成果を検証すると同時に，比況構文 It is like 節構文とその否定形 It is not like 節構文の諸特性を明らかにした。

第一に, 日英語の比況を表す構文の意味と機能を考察した。あることがらを他のことがらに喩えたり, 類似性を引き合いに出して聞き手にわかりやすく説明する構文がある。たとえば, 日本語には「～ようだ」で終わる構文がある。

(9) 山々の姿も, 広大な夜空に包まれて少しも重苦しく感じられず, 月明かりの照る夜空に北斗七星を仰いで見れば, どの星もが光を大きく放っている。まさにちょうど, 私の真上を照らしてくれているかのようだ。 （夏目漱石『草枕』）

(9)の「～ようだ」で終わる構文は, 話し手が先行することがらを他のことがらになぞらえて聞き手にわかりやすく説明するために発話されている。具体的には, (9)では星が光を放つ様が「まさにちょうど, 私の真上を照らしてくれているかのようだ」と喩えを介して比況描写されて聞き手に説明されている。このような, あることがらと他のことがらの類似性を引き合いに出して説明する構文, つまり比況構文は英語にも存在し, 談話で頻用されている。次に示す It is like 節構文(=(10a))と対応する否定形の It is not like 節構文(=(10b))がその例である。

(10) a. The way of raising your chances of being lucky is through creating more opportunities for yourself, and persistence is one way of doing that. It's like the more lottery tickets you've bought, and the more tickets you have, the more likely you are to win the lottery. This is lotto. (J. Rothman, *Hollywood in Wide Angle: How Directors View Filmmaking*)

b. "Kara was a little bit too quick for me today," said Radcliffe. "I knew she was in good shape but I was surprised that she was running that fast. But I was thinking 'don't panic' because it was not like I was running that slow."(*The Guardian*, 2007/09/01)

(10a)では, 先行する内容, つまり人が幸福になるチャンスを高める方法をわかりやすく説明するために, 下線部の構文の like 節内で宝くじの当選を話し手が引き合いに出している。(10b)では, 先行する内容, つまりマラソンのライバル選手 Kara が今日は走るのが速いということから聞き手が心中に思い浮かべると予測される具体的なイメージを引き合いに出して喩えたうえで, それを話し手が打ち消している。比況を表す It is like 節構文と It is not like 節構文に関して次のような知見が得られた。

(11) 両構文はいずれも先行する言語的文脈を受けて発話されること, 主題 it には先行する命題内容が話し手の知識にすでに取り込まれた既獲得情報であることを積極的に合図する働きがあることを確認した。

(12) It is like 節構文の基本的意味は,「＜先行することがら＞は～といった感じなのだ」,「＜先行することがら＞は～という印象なのだ」といった, 先行することがらから話し手が直感的に受ける感じや印象を表現することであることを実証的に説明した。

(13) It is like 節構文の like 節内で引き合いに出されるのは身近な「事物」であるとは限らないこと, 先行することがらとの関連で, 聞き手に無理なく理解できるような内容や容易に共感できるような事象もまた It is like 節構文の like 節内でしばしば表現されることを示した。

(14) It is like 節構文が"I swear", "I mean" などの談話標識と共起する事例を観察しながら, It is like 節構文の語用論的特性についても考察した。It is like 節構文の like 節内に提示される内容はそもそも聞き手には知り得ない, 話し手が心中で描く喩えやなぞらえである。このことから, 話し手は like 節内の説明が単なる思いつきやその場限りの喩えであるかの印象をできる限り排除しようとしたり, 逆に独断的, 独りよがりの言として聞き手に受け止められてしまうことを回避するために, それ以外にも比況を表現する余地があるという含みを残したり, 控えめに比況表現を伝達しようと試みることを明らかにした。

(15) 否定形である It is not like 節構文は, 先行する内容に関して聞き手が心中に思い浮かべると予測される具体的な状況イメージを引き合いに出して比況を表現したうえで, それを打ち消す働きがあることを観察した。先行する内容に関連して聞き手が心中に思い浮かべると推察される比況内容をあらかじめ引き合いに出して打ち消すことから, It is not like 節構文はさまざまな談話標識を伴ってしばしば発話されることを確認した。

第二に, 本研究成果として刊行された大竹（2009）『「の（だ）」に対応する英語の構文』が国内外の論考で言及され一定の評価が得られていることを確認し, 本研究成果の学術的位置づけと今後の発展可能性を検証した (Horie Kaoru (2011)("The Interactional Origin of Nominal Predicate Structure in Japanese: A Comparative and Historical Pragmatic Perspective." *Journal of Pragmatics*.); Kato Masahiro (2011)("Review: Otake, Y. (2009) "No (da)" *ni Taiosuru Eigo no Kobun*

(The Japanese *No da*-Construction and the Corresponding English Constructions." *English Linguistics*. (日本英語学会学会誌) Vol. 28-2.); 牧野成一(プリンストン大学) (The 18th Princeton Japanese Pedagogy Forum, May 7-8, 2011 特別講演「翻訳で何が失われるか：認知の問題を中心に」)等)。

なお, 平成 24-26 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）， 研究代表者：大竹芳夫）課題番号 24520534「日英語の指示表現と名詞節化形式の選択・出没の普遍性と個別性に関する総合的研究」の新規交付が内定しており，本研究で見出された基本的知見と着想を，次年度以降の研究でさらに深化，発展させながら，成果を国内外に積極的に発信する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計４件）
①「It is like 節構文の意味と機能」
『言語の普遍性と個別性』 第 3 号. 査読無. pp.13-33. 2012 年. 大竹芳夫（単著）.
②「英語の比況構文の諸特性に関する意味論的・語用論的考察」
『言語類型の記述的理論的研究』査読無. pp.95-117. 2012 年. 大竹芳夫（単著）.
③「What kind of 疑問文と What kind of {a/an}疑問文の意味と機能： 名詞句の意味特性の分析を通して」
『言語の普遍性と個別性』 第 2 号. 査読無. pp.13-40. 2011 年. 大竹芳夫（単著）.
④「英語教材開発への言語学的知見の活用」
『新潟大学経済論集』 第 87 号. 査読無. pp.235-244. 2009 年. 大竹芳夫（単著）.
〔図書〕（計１件）
①『「の（だ）」に対応する英語の構文』
東京：くろしお出版. viii+345pp. ISBN978-4-87424-464-7. 2009 年.
（2011 年 3 月増刷） 大竹芳夫（単著）.
【平成 21 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費（学術図書）研究代表者：大竹芳夫）課題番号 215060,日本学術振興会】
〔その他〕（計１２件）
①本研究と関連する研究成果図書：
文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *TOTAL ENGLISH NEW EDITION* 1. 東京：学校図書. 147pp. ISBN978-4-7625-5213-7. 2012 年. 大竹芳夫（編著）.
②本研究と関連する研究成果図書：
文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *TOTAL ENGLISH NEW EDITION* 2. 東京：学校図書. 145pp. ISBN978-4-7625-5214-4. 2012 年. 大竹芳夫（編著）.
③本研究と関連する研究成果図書：
文部科学省検定済教科書中学校外国語科用 *TOTAL ENGLISH NEW EDITION* 3. 東京：学校図書. 143pp. ISBN978-4-7625-5215-1. 2012 年. 大竹芳夫（編著）.
④本研究と関連する研究助成：
平成 23 年度新潟大学プロジェクト推進経費（発芽研究，研究プロジェクト代表者：大竹芳夫）「日英語の指示表現選択と名詞節化の諸相に関する記述的・理論的研究」（交付額：408,000 円）
⑤本研究と関連する研究助成：
平成 21 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費（学術図書）研究代表者：大竹芳夫）課題番号 215060,日本学術振興会
⑥本研究と関連する研究助成：
平成 21 年度新潟大学プロジェクト推進経費（奨励研究，研究プロジェクト代表者：大竹芳夫）「日英語の名詞節化と指示表現選択に関する意味論的・語用論的研究」（交付額：448,000 円）
⑦本研究と関連する研究助成：
平成 21 年度新潟大学人文社会･教育科学系長裁量経費による研究プロジェクト（学系奨励研究，研究プロジェクト代表者：大竹芳夫）「指示表現と名詞節化形式の選択に関する日英語比較対照研究」（交付額：450,000 円）
⑧本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 23 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」，講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （平成 23 年 8 月 18 日，於：新潟大学）講師：大竹芳夫
⑨本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 22 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」，講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （平成 22 年 8 月 18 日，於：新潟大学）講師：大竹芳夫
⑩本研究と関連する研究成果還元講座：
平成 21 年度教員免許状更新講習会
講習名：「言語学から見た英語」，講習題目「実践的コミュニケーション能力を育成する英文法指導の在り方」 （平成 21 年 8 月 18 日，於：新潟大学）講師：大竹芳夫
⑪KAKEN: 科学研究費補助金データベース
http://kaken.nii.ac.jp/ja/r/60272126
⑫研究代表者所属研究機関ホームページ
http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/R/staff/?userId=100000139

６．研究組織
(1) 研究代表者
大竹 芳夫 (OTAKE YOSHIO)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：60272126
(2) 研究分担者
なし
(3) 連携研究者
なし